

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

eed

No. 23

November, 2010

関西大学ニュースレター
発行日：2010年(平成22年)11月25日
発行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



SUMI

KAZUO

■リーダーズ・ナウ —5
在学生— 学術研究会 法律相談所 学生所長
法学部2年次生 宮崎 正彦さん
卒業生— 有限会社五感 代表取締役社長
株式会社ブチ・フランス 代表取締役社長
浅田 美明さん

■研究最前線
近現代大阪の社会文化景観の変貌を研究
息づかいが伝わる都市遺産の検証 —7
大阪都市遺産研究センター センター長
文学部 — 藪田 貴 教授
大阪都市遺産研究センター サブリーダー
文学部 — 大谷 渡 教授

ナノテク：超高感度センサー・エネルギー変換素子
ナノワイヤ技術の研究拠点を目指す —9
システム理工学部 機械工学科 — 新宮原 正三 教授

■トピックス [学内情報] —11
文部科学省GP事業「大学教育・学生支援推進事業
大学教育推進プログラム」に採択
文学士を实质化する〈学びの環境リンク〉

1万人参加の大規模地震避難訓練を実施
関大防災Day2010
～広がれ！みんなの安全・安心！

■社会貢献・連携事業／地域連携 —13
関西大学と月桂冠の共同企画で新発売
「京都水盆」の豊潤な地下水
ミネラルウォーター『自然の秀麗』誕生

第30回「地方の時代」映像祭2010
～地域からこの国を問う～
関西大学千里山キャンパスで開催
グランプリ・受賞作品、「名作ドキュメンタリー」上映

■関大ニュース —15
著名作家を招いて「国民読書年」記念特別企画 ほか

沿線価値は“教育、文化、安心”にあり

「社会力」を育てる

■対談 角 和夫(阪急阪神ホールディングス株式会社 代表取締役社長) × 上原 洋允(理事長)

「社会力」を育てる



沿線価値は“教育、文化、安心”にあり

- ◎角 和夫 ・ 阪急阪神ホールディングス株式会社 代表取締役社長
- ◎上原 洋允 ・ 理事長



今回の理事長対談のゲストは、
阪急阪神ホールディングスの角和夫代表取締役社長。
鉄道事業に従事し、阪急・阪神の経営統合では、陣頭指揮を執る。
沿線価値は“教育、文化、安心”にあり、
大学と鉄道会社は運命共同体だという。
学生の「社会力」を育てるために、今、大学教育に何が必要か？

◆阪急沿線で育ち、音楽と囲碁に熱中

上原 戦後初の大手私鉄グループ同士の経営統合を実現された角和夫社長は、関西大学ともご縁があります。2005年から2008年まで本学の経営審議会の委員、2008年から現在まで理事として、学校法人の経営に参画いただいております。また2006年から2009年まで、会計専門職大学院の教育顧問を、2008年秋から現在まで客員教授を務めていただき、教育研究についてもご協力いただいております。

関西大学は阪急電鉄の沿線にある学校ですが、角社長ご自身も宝塚市でお生まれになり、阪急沿線で成長され、現在は宝塚音楽学校の理事長でもあります。まさに阪急と共に歩んでこられた人生だと思いますが、どのような子ども時代を過ごされたのですか。

角 私の父は主に労働事件を担当していた弁護士で、阪急電鉄の顧問弁護士の仕事もしていました。大阪弁護士会の副会長を務めたのですが、私が小学校4年生の時に他界しました。母親は宝塚歌劇の大ファンで、阪急に対して特別な愛着を持っていました。私は小学生のころから母に連れられて宝塚歌劇を観に行き、阪急電車に乗って阪急百貨店へ行く、いわば阪急漬けの子ども時代を送りました。

中学高校時代はビートルズやベンチャーズをはじめグループサウンズがはやっていて、友達とバンドを組んで文化祭で演奏したりしました。音楽に熱中したおかげで、後年、自分で作詞・作曲した曲を宝塚歌劇団の生徒にプレゼントすることができました。

上原 早稲田大学政治経済学部の学生時代はいかがでしたか。囲碁は六段とお聞きしていますが、いつ腕を磨かれたのですか。

角 大学では親元を離れて学生生活を送りたいと思っていましたから、東京へ行くことが一つの目的でした。灘中学・高校で6年間、自我が目覚めるころに一緒だった仲のよい友達が大学で東京の大学に入りましたから、毎日同窓会状態でした。そろそろ勉強しようと思った2年目からは、大学紛争でロックアウト。そこで、囲碁と出会ったのです。囲碁が上達するためには、寝ていても天井に碁盤が現れるぐらい集中する時期が必要です。私の場合は、大学時代に2～3年、会社に入ってから2回ほど、そういう時期がありました。

◆並行して走る阪急・阪神の経営統合効果

上原 就職時に阪急電鉄を選ばれたのは？
角 当時はキャリアパスなどという考え方もなくて、定年まで

勤め上げるのが一般的でした。自分なりに満足のいく仕事をした人生だったと思うように、公共性も高く、いろんな事業をやっている阪急電鉄を選んだのです。

鉄道会社に入社したので、鉄道部門に配属が決まったときはうれしかったですね。若いうちから現場管理の経験を積ませてもらったことが、よかったと思っています。京都線運輸課長のとき、関西大学の入試の1週間ほど、関大前駅のホームで寒さに震えながら対応したこともありました。今日のICカードシステムにつながる、自動改札機の導入など駅務近代化の仕事にも早くから携わりました。

上原 いろいろご苦労もあったかと思いますが、いちばんうれしかったことは？

角 それは阪神電気鉄道の株を買い占めた投資ファンドに勝ったことです。会社を解体して換金しようという投資ファンドの思惑を、同じ鉄道事業者として阻止できたのですから。テレビで評論家やコメンテーターの方々が、並行して走っているライバル鉄道会社が一緒になって、どうやって統合効果を出すんだ、と散々おっしゃった。それは鉄道事業をご存じないからです。鉄道会社はそれぞれ沿線を持っていますから、阪神間で並行していても、海側を走る阪神と、山側を走る阪急はライバルではないのです。

確かに、同じ所にあるターミナルと百貨店はライバルです。ただ、百貨店業界は既に過当競争になっており、それが経営統合という形で一つのグループになりました。厳しい百貨店戦争を生き抜くのに、阪急、阪神がそれぞれ単独で戦うのではなくて、共に戦える強みが出てきました。お互いの顧客カードを統合し、この厳しい状況でも、今年も売り上げはプラスになっています。

◆大学と鉄道会社は運命共同体

上原 宝塚歌劇は阪急がはぐくんできた文化といえますが、阪急阪神の統合により、阪神タイガースもグループの一員になりました。勝っても負けても、5万人近いファンが球場に足を運んでくれるというのは、これも一つの文化だと思います。

角 もちろん、スポーツも重要な文化的要素です。また、宝塚歌劇に限らず、西宮北口にある兵庫県立芸術文化センターにも協力しております。鉄道会社にとって事業戦略の基本は、良い沿線をつくることです。約100年前に小林一三がいろいろと知恵を絞って、阪急沿線を開発したわけですが、時代の変化に合わなくなっている部分もあります。しかし、小林自身がこの言葉を使ったわけではありませんが、良い沿線をつくる上でのキーワードは“教育、文化、安心”の三つであり、これはその当時から変わっていないと思っています。

上原 阪急の場合は、京都、大阪、神戸という独自の伝統ある文化を有する都市を結び、沿線にそれぞれ個性ある街が広がっており、いくつもの大学があります。

■対談

角 関西大学のある北摂地域を含めて京阪神間に良い大学がたくさんあるというのは、沿線価値の点で非常にありがたいことです。大学と私ども鉄道会社は、まさに運命共同体と言えるでしょう。

◆弊害の多い就職活動の早期化に歯止めを！

上原 ここ数年、企業の人たちから、学生の質が落ちた、やる気が感じられないといった声を聞くことが多くなりました。昨年7月に、関西経済同友会の大学改革委員会が「社会が求める大学の人材輩出戦略」という提言を行っています。その中で、産業界が求めているものは、高度な専門学力だけでなく「社会力」であることが明示されています。社会力とは何かといえば、普遍的な教養や倫理観、他者と連携・協調できるコミュニケーション能力、またチャレンジ精神やリーダーシップ力、学習を継続する力など、社会において必要とされる資質や能力だという。いわば社会人としてかなり質の高い人材を求めているわけですね。

一方では、就職活動の早期化には歯止めが必要と、文部科学、厚生労働、経済産業の3大臣が連名で日本商工会議所、日本経済団体連合会など、各種団体の会長に要請しています。実際、今の学生は3年の秋ごろから就職活動に飛び回っている状況です。私などは3年になってから本格的に法律の勉強を始めまし



たし、大学での勉強は、1、2年で基礎を学び、3年から4年にかけてようやく実ってくるものです。企業側が要求している人材養成に対して、大学側には早期からの長期的な就職活動のために十分な教育ができないというジレンマがあります。角社長は経営者としてどうお考えですか。

角 おっしゃる通りです。企業も優秀な人材が欲しいのであれば、学生がきちんと4年間勉強できるように考えなければなりません。例えば、3年のときに海外留学すると就職活動ができないから留学を断念するなど、海外で见闻を広げたいという人の足を引っ張っているようではだめです。

ようやく東京で商社を中心に、4年の夏以降に採用試験を行う動きが出てきました。私も関西の会合などで機会があるたびに言っています。銀行や損保、証券などの金融関係がこの動きに続けば、学生がゆっくり落ち着いて学べる流れができます。企業だって、しっかり学校で勉強してきた優秀な学生に来てほしいですから。

上原 国際的な競争が激しくなっている現在、資源が乏しく人口減少社会の日本が厳しい競争に勝ち抜くためには、先端科学技術の開発はもちろんですが、教育、研究の力で国際的に活躍できる人材を育てることが肝要です。就職に追われて留学のチャンスを失ったり、大学での勉強の最後の仕上げが不十分に終わってしまうことは、大変残念なことです。金融機関は、特に採用選考の時期が早いようですね。

角 東京で、金融関係が同調することが決め手になると思います。地銀を除いて金融機関は意思決定が東京でなされており、残念ながら関西は出先という要素が強いのです。

◆情熱とコミュニケーション能力が必要

上原 3年次から就職活動を強いられる状況のなか、どのようにして「社会力」を身につけさせるかということに、現場の教職員もたいへん苦勞しております。本学が約2年前に定めた長期ビジョンでは、「激動する社会に挑戦し、考動する関大人が世界を切り拓く」ことを目指しています。このビジョンには、関大で教育を受けた学生は、自らの頭でよく考え、自律的かつ積極的に行動し、常に変革に挑み、失敗を恐れずアグレッシブな生き方をする人材になってほしいとの念願がこもっています。卒業後は、国内外を問わず大いに羽ばたいてほしいと思っていま

す。これを実現するためにも、本学では特に、教育改革、研究改革、社会連携、国際化に、強力に取り組んでいます。

日本学術会議は、文部科学省の諮問に対し、「大学と職業との接続検討分科会」を設け、今年7月に報告書を提出しました。その中で、就職活動の早期化、長期化は、大学教育に深刻な空洞化をもたらしているとして、大学教育の職業的意義の向上等を提言しています。特に、大学と職業の接続に関して見直し、各大学の教育改善を促しています。本学でも、教育現場の更なる創意工夫が必要です。

また、大学自身の在り方についても、産業界は、リーダーシップと責任の所在を明確にした組織に改革すべきだと考えているようです。企業のトップとして、関西大学の理事として、このあたりはどうお考えでしょうか。

角 大学として、優れた人材を世に送り出していけるかどうか、最も問われるところです。今おっしゃった「考動する関大」という標語が意味するところは、ベンチャー精神に通じるものがあります。私どもの会社の良い点を挙げるなら、小林一三の時代からのベンチャー精神です。小林が鉄道を敷こうとしたときに、既に南海は大阪～堺を、阪神が大阪～神戸を押さえていたわけで、田んぼの広がっている宝塚あたりしか残っていません。そこで新たな輸送需要を生み出そうというのは、まさにベンチャー精神であり、それを維持しようとするトップダウンでは無理です。私は、企業価値というのは時価総額ではなく、従業員のパワーの総和だと思っています。社員個人のスキルにとどまらず、やる気を高めるためには、従業員満足度を大切にしていける必要があります。

学校の場合は、先生の待遇を良くすると同時に生産性を上げてもらうことです。私も子どものころ、先生を好きになって勉強したように思います。好きになった先生、尊敬する先生は裏切れないし、期待に応えようとするものです。小学校から大学まで、優秀な方が教師になり、魅力ある先生が増えてほしい。

関西大学は新学部設置や学部再編などアグレッシブな改革を重ねて、他大学に比べてうまくやってきておられるからこそ、現在の成長過程があるのだと思います。長期トレンドでみれば学生の偏差値も上がってきており、これからも上がっていく土壌があるでしょう。沿線価値をつくっていただいている大学であり、我々は運命共同体ですから、ぜひとも頑張ってください

たいですね。
上原 全国から優秀な学生を集め、有能な先生の下で教育し、磨きをかけて、「考動する関大人」に育てることが、私たちの使命です。そして、卒業して社会に出たときに、「関西大学の卒業生はひと味違う」と、評価されることを目指しています。最後に、角社長からも、ひと言学生にアドバイスをお願いします。
角 まず、情熱ですね。それが今の若い人たちに少し欠けているように思います。何か好きになるものがあれば、そこに情熱が生まれてきます。私の場合は囲碁や音楽でした。

就職して職場に配属されたら、ここはおかしいと思うところが出てきます。それを正しいと思う方向に変えていく、強い意志をもって変革していくためには、情熱と粘り強さ、そしてコミュニケーション能力が必要です。自分の考えを理論立てて、熱意をもって、上司や部下も含めて関係者にきちっと話ができることが大事です。また、成果はスキルと動機づけ(やる気)とチームワークの掛け算によるとされますが、チームの力というのは自分だけでは生み出せません。先ほど「教育、文化、安心」と言いましたが、安心して住める街も一人ではつくれません。みんなで安心して住める街をつくっていくのと同様に、周囲と力を合わせて物事を成し遂げられる人になってほしいと思います。
上原 本日はどうもありがとうございました。



角 和夫(すみ かずお)
1949年兵庫県生まれ。73年早稲田大学政治経済学部卒業、阪急電鉄株式会社に入社。鉄道事業に従事し、97年流通本部流通統括室長、98年鉄道本部鉄道計画室長。2000年取締役、02年常務取締役などを経て、03年から代表取締役社長。05年の持株会社化に伴い阪急ホールディングス代表取締役社長を兼務。06年に阪神電気鉄道との経営統合を実現、阪急阪神ホールディングス代表取締役社長に就任。10年宝塚音楽学校理事長。関西大学経営審議会委員、同会計専門職大学院教育顧問を経て、08年から関西大学理事を務める。

就職して職場に配属されたら、ここはおかしいなど思うところが出てきます。それを正しいと思う方向に変えていく、強い意志をもって変革していくためには、情熱と粘り強さ、そしてコミュニケーション能力が必要です。

関大で教育を受けた学生は、自らの頭でよく考え、自律的かつ積極的に行動し、常に変革に挑み、失敗を恐れずアグレッシブな生き方をする人材になってほしいとの念願がこもっています。



上原 洋允(うへはら よういん)
1933年香川県生まれ。57年関西大学法学部卒業後、大阪市立大学大学院法学研究科に進み、58年司法試験合格、59年同研究科修了。61年から弁護士を開業。関西大学司法試験受験研究会で指導に当たり、関西大学法律相談所の顧問を務める。95年大阪弁護士会会長、近畿弁護士会連合会理事長、日本弁護士連合会副会長。2004～06年関西大学大学院法務研究科(法科大学院)特別顧問教授。03～06年関西大学校友会会長。学関西大学常務理事、専務理事を経て、08年10月理事長に就任。

LEADERS NOW!

学生による 法律相談の伝統

熊本市・八代市で
「夏期無料移動法律相談」を実施

●学術研究会 法律相談所 学生所長 法学部2年次生
宮崎 正彦 さん



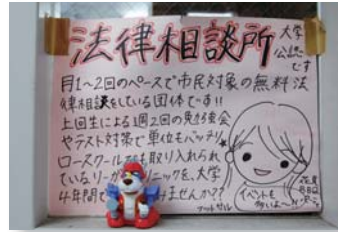
30人近い学生が参加した「夏期無料移動法律相談」

学術研究会法律相談所は、1962（昭和37）年の設立当初から、キャンパスの内外で無料法律相談を行ってきた。今年の夏は熊本市と八代市で「夏期無料移動法律相談」を実施し、約100人の相談を受けた。全国で活躍している本学OB弁護士らの多くが、この法律相談所の活動が法曹としての原点になっているという。11月から1年間、学生所長を務めることになった宮崎正彦さんに聞いた。



法律相談所は関西大学の学術研究会に属し、学生が自主的に運営しているが、顧問教員や関西大学卒業生の弁護士の指導で一般市民を対象とする本格的な無料法律相談を行っている。月に2回、第2水曜日は天六キャンパスで、第3（または第4）土曜日には千里山キャンパスで実施。大東市や大阪市で開催することもある。電話で予約を受け付けて、どんな事案かを聞き、予習して臨んでいる。

「学生が質問の受け答えををするのですが、最後の詰めや間違っていたところの指摘などを、先生や弁護士さんにさせていただいて



宮崎 正彦—みやざき まさひこ
■1990（平成2）年、大阪府生まれ。初芝富田林高校卒業。法学部2年次生。2010年11月から学術研究会法律相談所学生所長。



ます。だいたい1時間程度を目安にしていますが、事案が複雑だったりすると、1時間半ぐらいに延びることもあります。お受けしている事案は、親族・相続・借地借家・相隣関係・消費者問題・損害賠償に関する問題等、民事一般です。最近は、離婚、隣の住民とのトラブル、破産、労働問題などが多いですね。刑事事件は受けていません。本で勉強するのと実際にお話を聞くのでは、やっぱり違います。この条文はこう使うのか、という新しい発見があります」

今年の「夏期無料移動法律相談」は8月21日、22日に八代市と熊本市で実施。3年生、2年生合わせて30人近い学生が参加し、1ブースにつき、学生3人と教員・OB弁護士が対応した。「熊本の相談で、現行民法が施行された昭和23年以前の民法にかかわる事案があり、今のコンパクト六法に載っていないことだったので、その場で調べようがなく、全く困ってしまいました。結局、先生が答えてくださったのですが、年配の方が相談に来られたときは、こういうこともあります。今はまだ僕自身の経験が浅いのと勉強量が足りないため、相談者の方の質問に的確に答えることができません。移動法律相談では、さまざまな事案に対して十分な準備ができずに臨むことが多いので、日ごろの勉強量が試されます。先生方の助けなしでも受け答えできるようにしたいと思います」

「理論と実践」を基本理念とする法律相談所では、実社会で起こりうる多様な問題に直面し、弁護士をはじめとする実務の場で活躍している先輩が、どうやって事案を解決していくのかを間近で見ることができる。法律相談スキル向上のため、模擬相談という形で週3回、勉強会も開いている。「この環境に身を置くと勉強しなければという気になります」。法科の関大の伝統は、法律相談所に生きている。

大阪発ブランド 西洋風“日本の心”菓子

大阪銘菓で幸せづくりに貢献したい

●有限会社五感 代表取締役社長
株式会社プチ・フランス 代表取締役社長
浅田 美明 さん —経済学部 1983年卒業—

「日本の洋菓子を創る」という思いから誕生した五感のロールケーキやマドレーヌには、米粉や黒豆など和の素材が生かされている。「お菓子は名前も価格も自由に付けられて、発信力があるのです。そういう自由な職業に出会えてよかった」と浅田美明社長は言う。地域に根づいたお菓子作りの道は、大阪発のブランドに通じていた。



浅田 美明—あさだ よしあき
■1960（昭和35）年、大阪府生まれ。83年関西大学経済学部卒業。学生時代から家業の洋菓子店「プチ・フランス」に入社し、菓子作りに携わる。2003年、阪急百貨店への出店を機に「五感」を設立。現在、両社の代表取締役社長。



幼い子どもに「将来、何になりたいか」を尋ねると、「ケーキ屋さん」と答える子が多い。ケーキを作って売る——そこには甘くかぐわしい夢がある。だが、仕事となると夢ばかりも見られない。

浅田さんは、お菓子の卸業を営む家に生まれた。小さいときから卵割りを手伝い、中学生のときにはバウムクーヘンを焼いていたという。高校3年生の9月に創業者の父親が小売業に転じ、直営店として今のプチ・フランス上新庄店を開いた。洋菓子のほか、パンも焼き、2階にはイタリアンレストランも併設した。しかし、小売業の経験不足もあって、店は赤字の連続。名門ホテルのシェフに来てもらって作った高価なケーキは、残念ながらほとんど売れなかった。浅田さんが関西大学に入学したころには、家業を懸命に手伝わなければならない状況だった。

「大学時代の思い出という、仕事のことばかりです。月に300時間から350時間、働き詰めでした。出席を重視しない講義

を選び、テスト前に情報を提供してくれる友人にも助けられました。21歳ごろからヌーベルパティスリー・ドゥ・ジャボンというパティシエの勉強会に参加し、諸先輩方の教えを請いながらお菓子作りに励みました。おいしくて喜ばれるお菓子を作るには、味と価格のバランスも大事であることも学びました」

1992年に、浅田さんは独立して茨木市内に店舗を持った。その後、両親の病気により、プチ・フランスの東淀川区の2店、茨木の2店を浅田さんが経営することになった。さらに、梅田の阪急百貨店への出店依頼が来た。

「オーナーシェフの店がチェーン展開していくと、本来の味わいや匂いといったものが薄れがちです。地域のお客様と共にお菓子を作るという意識でやってきたことを、ずっと大事にしていきたい。そこで、デパート出店時に、どのお客様に喜んでいただけた洋菓子を作りたいのかと自問自答し、深く考えさせられました。そこで出た答えが、『日本の洋菓子』を創る』というものでした。お米が余っているにもかかわらず、食糧自給率の低さが気になっていた折、米粉を中心に国産の素材でいこうという強い思いがわいてきたのです」

2003年に設立された五感の阪急うめだ本店は大盛況。ロールケーキの「お米の純生ルーロ」、黒豆入りマドレーヌ「ええもん」は人気商品に成長した。05年には河合浩蔵が大正時代に設計した登録有形文化財である新井ビル（大阪市中央区）に北浜本館が、続いて京阪神間に3店がオープンした。東京や九州からも出店依頼があるが、大阪発のブランドにこだわりたいという。

「大阪銘菓を作って、心豊かな人を育てたい。お客様、従業員はじめ地域の幸せづくりに貢献したい。大阪にこのお菓子の店があつてよかったと思われるものにしていきたいですね」

■研究最前線

近現代大阪の社会文化景観の変貌を研究

息づかいが伝わる
都市遺産の検証

大阪都市遺産の史的検証と
継承・発展・発信を目指す総合的研究拠点の形成

- 大阪都市遺産研究センター センター長
文学部
藪田 貫 教授
- 大阪都市遺産研究センター サブリーダー
文学部
大谷 渡 教授



牧村史陽写真コレクション

前号に引き続き、文部科学省平成22年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された研究プロジェクトを紹介する。「大阪都市遺産の史的検証と継承・発展・発信を目指す総合的研究拠点の形成」は、「なにわ・大阪文化遺産学研究中心」の成果を受け継いで創設された「大阪都市遺産研究センター」が中心となって推し進める5カ年間の研究事業だ。近現代における大阪の都市景観変遷の史的解析とその全体像を解明しようとする研究について、代表者の藪田貫教授とサブリーダーの大谷渡教授に聞いた。

■「なにわ・大阪文化遺産学研究中心」の意義

— 本研究プロジェクトに先駆けて展開された私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチ・センター整備事業)の「なにわ・大阪文化遺産学研究中心」(平成17～21年度)について。

藪田 オープン・リサーチ・センター整備事業では、関西大学が開かれた研究組織として、大阪の地域の人たちとネットワークを作りながら活動してきました。「なにわ・大阪の文化遺産」をキーワードに、多方面で“大阪”を発信できたと感じています。天満宮を含む天神橋筋商店街、平野、八尾、南大阪の道明寺など、いろんなところへ出かけて調査したり、なにわ伝統野菜を栽培している小学校と連携するなど、地域のネットワークを広げることができました。



大阪の都市景観変遷の史的解析の研究を手がける、藪田貫教授(左)と大谷渡教授

関西大学は大阪で生まれ育った大学であるにもかかわらず、これまで大阪をテーマにした本格的な研究をやってこなかったのです。大阪のことを旗印に掲げた共同研究を立ち上げて、それが内外に明らかになったことが、「なにわ・大阪文化遺産学研究中心」の最大の意義だと思います。

関西大学の直接の前身は関西法律学校ですが、大阪には江戸時代から懐徳堂や適塾がありました。関西大学には泊園書院の蔵書である泊園文庫があります。さまざまな教育遺産の蓄積があって、その中から関西法律学校も生まれてきたのです。そこには大阪の経済や商業活動もあれば、海外との関係もあるし、大阪の歴史的なポテンシャルもあるのです。このことが今回のプロジェクトの前提です。

— 「豊臣期大坂図屏風」が有名になりました。

藪田 「豊臣期大坂図屏風」の国際学術研究を契機に、本学は同屏風所蔵のエッゲンベルク城と大阪城天守閣間の「城郭協定」締結、同城所在のオーストリア・グラーツ市と大阪市との都市間協定実現に大きな役割を果たしました。

豊臣期まで一気にさかのぼってしまいましたが、関西大学が大阪を研究するということのシンボルが屏風であった、と理解していただけたらいいでしょう。大阪の人々が大阪を研究する、歴史的にきちんと研究することの大事さを、あの屏風が象徴して語ってくれたのではないかと、私は思っています。

■CGによる可視化で都市景観の変遷を検証

— “都市遺産”という概念と研究テーマは？

大谷 大阪の歴史的・社会的・経済的な変遷の中で残ってきた、あるいは形成され、変容してきた、大阪の持っている文化的な力の全体を、大阪という都市の遺産としてとらえ、そこへ目を向けて研究していきたいと思っています。「近現代大阪の社会文化景観の変貌」を基幹テーマに、「『水都』大阪の伝統文化と暮らし」「『商都』大阪の経済と学問」という二つのサブテーマを立てています。



景観の変遷が人の暮らしに根ざしたものであれば、人々の暮らしの息づかいが伝わる生活と文化の検証が大切です。したがって、社会生活・文学・芸能などについて、文献学的アプローチにより、“形”と“心”の両面から、その変化を具体的に跡付けることは、本プロジェクトの核心をなすものではないかと考えています。経済的変化や工業化によって建物や景観が単に変わったということではなく、息づかいの部分にまで入り込んで、どう変わったのかを見ていきたいのです。

— 研究プロジェクトの目的は？

大谷 大阪城築城によって築かれた近世都市大阪は、明治から昭和初期、第二次世界大戦後と大きく変貌してきました。大阪城内の建物も、商家が軒を並べた船場も、道頓堀の興業街も、近現代化の過程と空襲による壊滅・復興を経て、その姿は大きく変化しました。都市景観の変貌は、人々の暮らしと文化の変化を映し出しています。本プロジェクトは、今日の大阪圏に堆積する都市遺産を歴史学的に検証し、その継承・発展・発信を目指す戦略的研究の中核拠点を形成することを目的としています。

まず、都市景観の変遷を検証するために、2次元CGによって湾岸・河川・道路・町並みなどを映像として可視化します。近世初期・明治期・昭和初期・終戦期を重点的に取り上げ、歴史的、地理的変遷を俯瞰する広角的視点に留意した映像を制作します。

近世以来、船場の商家の伝統的教養と堅実で質素な文化風土、大きな時間的見通しを持った商業感覚などは、近代化過程でどのように展開するのか。懐徳堂や泊園書院などの漢学は、大阪における近代精神受容の中でどのような役割を果たしたのか。適塾の場合はどうか。これらの視点での研究交流も積極的に進めます。道頓堀も船場も太平洋戦争末期の空襲で壊滅しましたが、“形”の破壊による文化継承への影響を検証し、特定した地点の3次元CG映像を制作し、その史的意味を空間的に表示します。



御堂筋(映像・昭和21年ごろ) 財団法人大阪国際平和センター所蔵

▲大阪市全景(市南部)(大正3年)
出典:『大阪府寫真帖』
大正3年11月5日発行
出版:大阪府



完成した御堂筋(昭和12年)▶
出典:『写真集おおさか100年』
昭和62年4月12日発行
出版:サンケイ新聞社

■研究叢書刊行、国際シンポジウム開催

— 研究の進み具合や今後の予定は？

大谷 大阪時事新報には、明治・大正・昭和期の大阪の社会と文化に関する日々の記事が詳細かつ豊富に掲載されています。そこから、都市変動、文学や芸能・映画などに関する記事を丹念に拾い上げて、学術的にも、また一般の方も利用できる目録を作成し、『大阪都市遺産研究叢書』として来年から順次刊行していきます。それに関連する研究発表会も開催します。

都市景観の変遷の例として、天王寺区筆ヶ崎町の大阪赤十字病院があります。病院の周りは空襲で焼けましたが、病院の立派な建物は残り、戦後はGHQに接収されました。そこに日赤の看護婦養成所があり、従軍看護婦の派遣を担っていたのです。中国大陸やフィリピンの激戦地の陸軍病院などに派遣され、何人の方が戦地で命をなくし、大変な状況で引き揚げてこられた、その母校なのです。

私は生き残った方々を訪ねてお話を聞き、史料や写真を収集しているところです。広東での写真もあります。看護婦さんたちが運動会をしていて、入院患者さんが見ている写真も。広東占領、海南島占領、北部仏印進駐という流れにそって、派遣されてゆく看護婦さんたちの苦勞が目に見えそうです。たとえば悲しい状況があっても、そこに青春があったんですね。彼女たちがかつて学んだ大都市大阪の意味も見えてきます。まさに、息づかいが感じられるのです。

このあたりのことは、来年、アジアの研究者も交えた国際シンポジウムを開いて発表する予定です。

※ p.08の写真はすべて大阪都市遺産研究センター提供

研究最前線

ナノテク：超高感度センサー・エネルギー変換素子

ナノワイヤ技術の研究拠点をめざす

ナノワイヤを用いた超高性能センサー及びエネルギー変換素子の研究

システム理工学部 機械工学科
新宮原 正三 教授

文部科学省平成22年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された「ナノワイヤを用いた超高性能センサー及びエネルギー変換素子の研究」では、先端科学技術推進機構・システム理工学部、及び関連企業の11人の研究者が、ナノワイヤを用いた超高感度磁気センサー・化学センサー等の高性能センサー、及び太陽電池・熱電変換素子等の高効率エネルギー変換素子を研究開発する。今回の研究最前線は、当プロジェクトの代表者である新宮原正三教授に聞いた。



ナノワイヤ鑄型形成・成長技術の実績の上に

— 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された研究プロジェクトの目的や概要について。

最近の科学技術への期待は、よりエネルギー消費が小さく、安全で利便性の高い技術へと向かっています。ナノワイヤはその期待に応えることのできる物質であり、体積に対しての表面積比率が著しく高く、高感度センサーやエネルギー変換素子への応用に適した材料です。

本プロジェクトでは、私たちが独自に開発した技術である「ポーラスアルミナ・ナノホール(AAO)テンプレート(鑄型)」を用いて、数十ナノメートル(nm)以下に直径を制御した各種ナノワイヤを作成し、これらを使って高性能センサーと高効率エネルギー変換素子を研究開発します。

研究体制としては、機械工学科、電気電子情報工学科、物理・応用物理学科の3学科にわたっています。ナノワイヤ鑄型形成・成長グループが供給する各種のナノワイヤを用いて、4グループが次のような研究を推し進めます。

- 磁性体コンポジットナノワイヤを用いた超高感度磁気センサー
 - 高密度半導体ナノワイヤの成長と高効率太陽電池
 - 半導体ナノワイヤを用いた高感度化学センサー
 - 半金属ナノワイヤを用いた高効率熱電変換素子
- ※ 1nm = 10⁻⁹m = 10億分の1メートル

ナノチューブよりも実用性に優れたナノワイヤ

— ナノワイヤはナノチューブほど一般に知られていないようですが、ナノワイヤを用いるメリットは？

ナノ細線のうち、ナノチューブと呼ばれるものは真ん中にす

き間がありますが、ナノワイヤは中身が詰まっています。ナノテクブームでカーボンナノチューブが脚光を浴びて、日本でも多くの研究資金が投入されていますが、私どもの目からみるとあまり成果が出ていません。トランジスタに適用でき、超高速スイッチング動作も確認されているということですが、集積化がけっこう難しく、半導体と金属を作り分けることができないのです。結局、ナノチューブは思ったほど実用に適さないことが分かってきました。

一方、ナノワイヤのほうは半導体、金属で作分けすることができます。半導体や磁性体など、いろんな物資をナノ構造に作り込んでいく技術があれば、大量に作ることもできます。それぞれのアプリケーションに適したナノ構造体を選んで作れるメリットがあります。ナノ粒子という切り口もあるのですが、ナノワイヤは電極を付けるのに適していて、集積化もうまくやればできます。

半導体ナノワイヤに関しては、欧米で新規のセンサー技術についての研究が急速に進展しています。一方、わが国ではナノワイヤ分野の取り組みが全般に著しく遅れており、急いでナノワイヤ研究拠点を立ち上げねばならない時期が来ています。

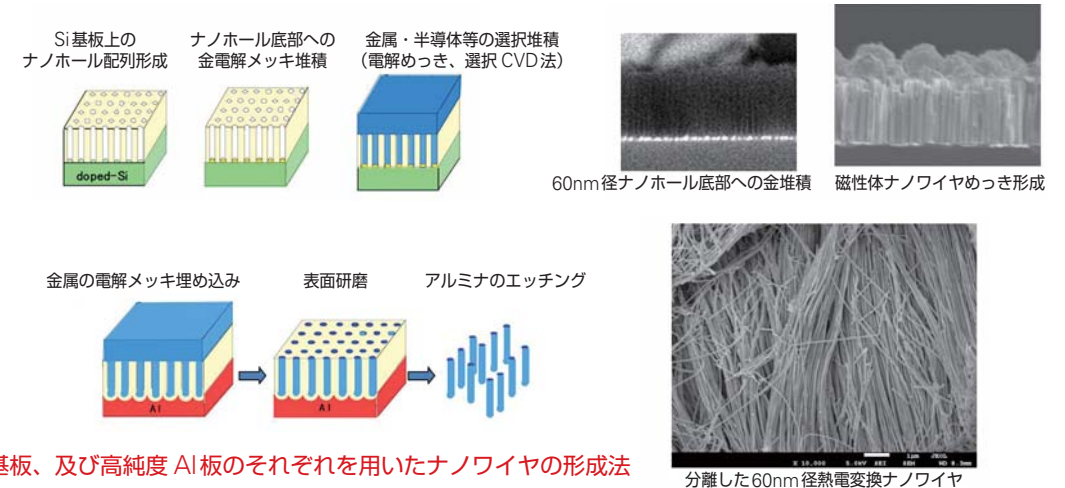
世界初！シリコン基板に垂直な単結晶シリコン・ナノワイヤの成長

— ナノワイヤを作る技術のベースになっている「ポーラスアルミナ・ナノホール(AAO)テンプレート」とは？

簡単に言うと、アルミニウムの食器に使われているアルマイト処理をした多孔質の鑄型です。食器類はアルミニウムを陽極酸化して、酸化膜の厚い皮膜を作って保護しているのですが、電圧一定でアルマイト処理をすると、表面に垂直なナノホール

基礎技術(ナノホール鑄型)の準備状況

- AI陽極酸化によるナノホール配列形成の特徴
 - ・ 自己組織化により直径が非常に揃っている
 - ・ ホール直径は、陽極酸化電圧にほぼ比例し、5nm-500nmの範囲で制御可能
 - ・ 半導体基板上へのナノホール成長技術は世界のトップレベル



シリコン基板、及び高純度 AI 板のそれぞれを用いたナノワイヤの形成法

分離した60nm径熱電変換ナノワイヤ



▲ナノホールの上面図

が平行して成長するということが分かってきたのです。1990年代後半よりナノ構造形成のための鑄型に利用する研究がなされてきました。

陽極酸化アルミナは、さまざまなサイズのナノホールの規則配列を自己組織的に形成することが可能な物質です。十数年の間に世界中に広まって、ナノテクを牽引する技術の一つになっています。私どもはかなり早い時期に、1996

年ぐらいから手がけてきています。ホール直径は陽極酸化電圧にほぼ比例し、5nm~500nmの範囲で制御可能です。

— 特に、シリコンなどの半導体基板上にナノホール配列を形成する技術は、世界に先駆けて確立されたのですね。

センサーや太陽電池に応用するためには、結晶性が良くないといけませんから、単結晶シリコン・ナノワイヤを作りたいわけです。単結晶ナノワイヤを生やすには、単結晶のシリコン基板の上から生やすのがいちばん良いのです。シリコン基板にきれいなナノホール配列を作るという部分に関しては、世界的にもトップレベルの技術を持っていましたので、シリコン基板上に垂直に生えた単結晶のシリコン・ナノワイヤの成長に世界で初めて成功しました。2006年から2007年にかけて論文を発表しています。

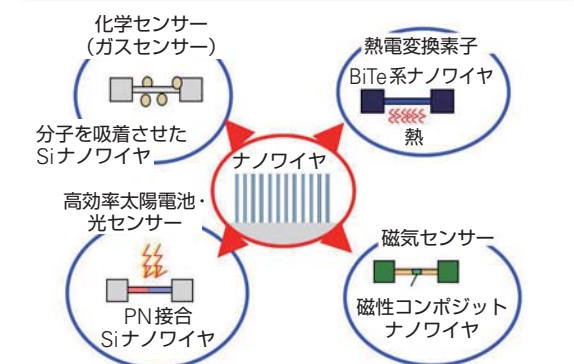
シリコン・ナノワイヤの成長は、基板に斜めに生やすのはかなり簡単なのですが、垂直に立てるのは難しい。垂直に高密度に立ったナノワイヤだと応用がしやすく、例えば縦型トランジスタを作ることも可能です。また、太陽電池への応用もかなり期待できます。入ってきた光が反射・散乱して外に飛び出ることがなくなり、内部に取り込まれて吸収効率が上がる結果、エネルギー変換効率も上がることが予測されるからです。

応用範囲は広く、社会に貢献できる

— 今回の研究成果によって将来的に期待されることは？
高感度ナノワイヤセンサーは、図に示すとおり、さまざまな分野での産業応用が考えられます。

高密度記録媒体や電子機器、輸送機器や医療機器などの精密機械に利用される各種センサーの性能が飛躍的に向上し、より安全な高度情報社会の実現に貢献できます。また、省エネルギー化、クリーンエネルギー化に大きく寄与しますので、地球環境保全に貢献できます。

高感度ナノワイヤセンサーの産業応用



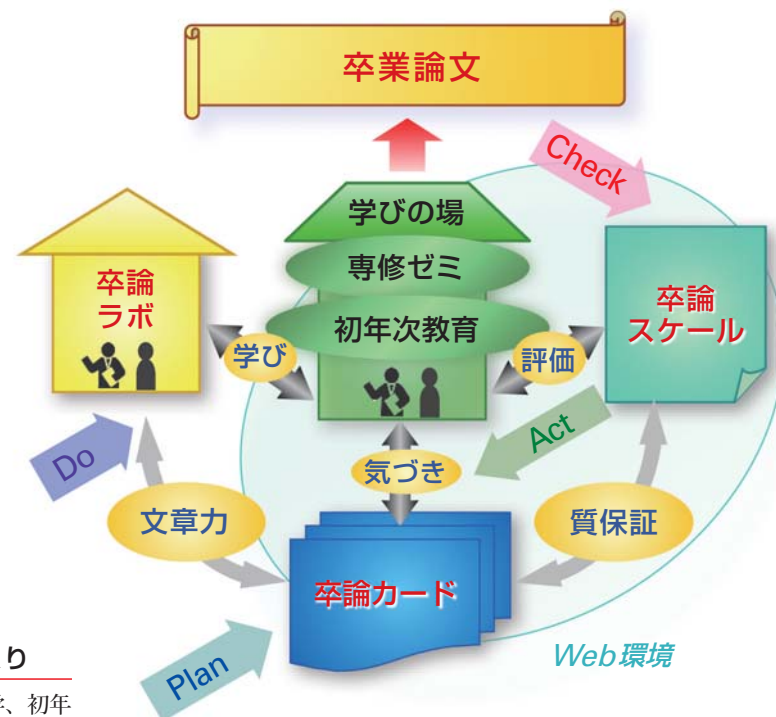
磁気センサー	ハードディスクの磁気ヘッド、MRAM等の磁気メモリ素子、電流検知センサー、方位センサー、etc
化学センサー	H ₂ 、O ₂ 、NO _x 、SO _x 、CO、CH ₄ 、NH ₃ 等のガスセンサー、etc
光センサー(波長選択性)	光スイッチ、高速応答分光器、医用機器、光通信、太陽電池、etc
熱電変換素子	体熱利用の腕時計・心臓ペースメーカー電源等、熱電冷却素子、排熱利用発電(エンジン排熱利用、ゴミ焼却排熱利用)、etc

文部科学省GP事業「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」に採択

文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉

——卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による“気づき”を促す仕組み作り——

文部科学省GP事業における平成22年度「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」に、文学部が申請していた「文学士を実質化する〈学びの環境リンク〉」が採択された。今回のプログラムには、全国の国公立大学などから298件の申請があり、30件が選ばれた。関西大学文学部の学びはどのように進化するか。



▲〈学びの環境リンク・イメージ〉

◆卒業論文作成を通して学士力を培う環境づくり

関西大学文学部では、1学科多専修制による一括入学、初年次教育の充実、2年次専修分属、19の専修領域におよぶ幅広い学び、専修ゼミによる卒業論文作成を通じた深い専門的探求など、継続的に改革を進め、現在、多様な領域の総合性と課題探求の独創性を培う教育課程を実現している。

このような教育課程のもとで、学生自身の気づきと主体的な学びを促すことによって、多様な社会の中で生きる力(学士力)をより効果的に培い、約2万字(400字原稿用紙50枚程度)におよぶ卒業論文の作成過程を通じて文学士を実質化するため、初年次教育・専修ゼミを学びの中心にした学びの環境づくりに、今年度から3年間にわたって取り組む。

◆3つの環境づくり〈学びの環境リンク〉とは？

具体的には次の3つの環境づくりによって〈学びの環境リンク〉を形成する。

●卒論ラボ

確かな文章力を育むために、アカデミック・ライティングの環境づくりをめざして、〈卒論ラボ〉と名づけた施設を設置し、初年次教育・専修ゼミと連携しながら啓発行事や講座の開催、レポート・卒業論文の作成指導・支援を行う。

●卒論スケール

自分自身の達成度を測るために、卒業論文作成にどのような専門的知識・理解が必要であり、その評価はどのような基準でなされるのか、などを策定し、それを〈卒論スケール〉と名づけてweb上に明示化し、学習成果の検証と質保証の環境を整える。

●卒論カード

初年次教育・専修ゼミを中心にして気づきと主体的な学びを育むために、学びのプランニング、各テーマの文献、また卒業論文の構想や草稿、さらにはスタッフからのアドバイスなど、卒業論文作成に必要なデータを〈卒論カード〉と名づけたweb上の「ポートフォリオ」に統合し、web環境を整備する。

★〈卒論カード(Plan)〉には〈卒論ラボ(Do)〉と〈卒論スケール(Check)〉の情報をも統合することによって気づきと主体的な学び(Act)を促し、卒業論文の作成に最適な〈学びの環境リンク〉を形成する。



1万人参加の大規模地震避難訓練を実施

関大防災Day2010 ～広がれ！みんなの安全・安心！

エリアワンセグで学生の携帯に情報配信

授業中にマグニチュード7.6の大地震が発生！
——関西大学ではどのように対応するか？
9月28日、総面積が約35万㎡という
広大な千里山キャンパスで、学生・教職員約1万人が参加する
大規模な地震避難訓練が実施された。

◆大地震発生～避難～安否確認

関西大学は、「危機管理マニュアル」を作成した2008年度にも大規模な地震避難訓練を実施した。2度目の今回は「関大防災Day2010」として、避難訓練をはじめ、防災にかかわるさまざまなイベントも併せて行われた。

訓練では、2時限目の授業中にマグニチュード7.6の上町断層直下型地震が発生したと想定し、学生・教職員の地震発生時の初動対応から対策本部の設置、避難誘導、避難者の安否確認に至るまで、本学オリジナルの「地震対応マニュアル」に基づいて実施した。

午前11時35分、キャンパス全域で避難訓練実施の告知放送があり、11時40分、地震発生を告げる地震音が流れた。直ちに、凜風館1階学生ラウンジに対策本部を設置。教職員らが各避難場所まで学生を誘導。その後、安否確認シートを配布・回収した。

◆エリアワンセグで緊急時の情報確認

今回の新しい試みの一つは、エリアワンセグを用いた情報配信。緊急災害時には、さまざまな情報が安全を大きく左右する。黒田勇副学長は、「エリアワンセグなどを使って大学から学生に対し情報を流すことで、安心感を与えることはとても意味がある」と言う。

エリアワンセグとは、携帯機器向けの地上デジタル放送である



エリアワンセグを用いて、緊急時の情報を携帯電話に配信



凜風館に設置された対策本部

「ワンセグ」を使って、テレビ局の放送とは別に、狭いエリアに限定して独自の映像やデータを配信するサービスのこと。この避難訓練では、朝日放送と協力し、対策本部で収集した交通機関の運行状況の情報や、被災後の行動指針等を、学生の携帯電話に配信する実験を行った。学生らは、学内の被災状況、避難経路、帰宅時の注意事項などを受信し、情報を取得することができた。

◆疑似地震体験で避難方法にも注目



午後からは、「防災講演トークイベント」、吹田西消防署による「普通救命講習会」も開かれた。

現場では、学生ボランティアが活躍。バケツ200個を使用した「給水(バケツリレー)検証実験」で、有事の必要人員や時間の検証を行った。さらに、地震体験車による「地震体験コーナー」、テントハウス内に無害な煙を発生させる「煙体験」にも、多くの学生が参加した。揺れや煙の怖さを体験することにより、避難方法にも関心が向けられるようになり、防災意識が高まった。

● 関西大学と月桂冠の共同企画で新発売

「京都水盆」の豊潤な地下水 ミネラルウォーター『自然の秀麗』誕生



関西大学と月桂冠株式会社(大倉治彦取締役社長)が共同で企画したミネラルウォーター『自然の秀麗』が、10月20日に発売された。京都伏見の地下水で、長年にわたり日本酒の仕込水として採水する水だ。今回の共同企画は、関西大学と伏見酒造組合の連携協力協定の締結、さらにさかのぼると楠見晴重学長による京都水盆の広域地下水利用と適正な維持管理システムの構築に関する研究に源を発している。



● 「京都水盆」研究の成果から共同企画へ

京都の地下には、「京都水盆」といわれる多量の地下水が存在している。その良質の水が茶道や友禅染、京料理、豆腐、和菓子などを生んだ。もちろん伏見の酒造りも。その水がミネラルウォーターとして、どこでも飲めるようになった。

楠見学長を中心とする環境都市工学部地盤環境工学研究室は20年以上にわたり、正確な地形・地質や水量の把握に努め、さまざまな調査資料を詳しく分析し、地下構造を精密に推測して計算してきた。3次元的に京都水盆を表すことにも成功した。それにより、京都水盆には琵琶湖の水量(270億トン)に匹敵する約211億トンの地下水が蓄えられていることが分かった。



「京都水盆」の調査・分析に取り組んできた、楠見学長と環境都市工学部地盤環境工学研究室の院生たち(月桂冠大倉記念館)

この研究は2002年にNHKの特集番組で放映され、また、2003年京都で開催された第3回世界水フォーラムでも紹介された。その後も、地下水をコン

ロールする、安全でエコロジカルな都市づくりの研究を続けてきた。

さらに、この研究が基になって2009年12月、関西大学と伏見酒造組合は、地下水の適正利用と環境保全について共同研究していくことなどを盛り込んだ連携協定を締結した。同組合の組合員である月桂冠とのこのたびの共同企画は、関西大学が約450年続いている伏見の酒造りに欠かせない地下水を未来にわたって保全し、京都の代表的な伝統産業を持続させる研究成果の一部である。

● 1200年の都の文化を支えた地下水

● 1200年の都の文化を支えた地下水



「自然の秀麗」というネーミングは、研究に携わる研究室の学生らとミーティングを重ね名づけたもので、関西大学学歌(作詞：服部嘉香、作曲：山田耕筰)の冒頭にも登場する。

味は、くせがなく、まろやかな水(軟水～中硬水)で、そのままはもちろんお茶やコーヒーにも適している。素材の良さを引き立てることから、和の料理にも合う。1200年にわたり都の文化を支えたこの豊潤で良質な地下水と、それを守っていくことの大切さを多くの人に知っていただきたいという思いを込めて、月桂冠から発売されることになった。ペットボトルのデザインもさわやかだ。

発売後は、関西大学のキャンパス内売店、月桂冠大倉記念館、インターネットサイトから購入できる(500ml、定価100円税込)。

● Online Shop 月桂冠
<http://www.rakuten.ne.jp/gold/gekkeikan/>

第30回「地方の時代」映像祭2010

～地域からこの国を問う～

関西大学千里山キャンパスで開催
グランプリ・受賞作品、「名作ドキュメンタリー」上映

関西大学、吹田市、日本放送協会、日本民間放送連盟が共同で開催する「地方の時代」映像祭が、11月20日～26日に千里山キャンパスで開催された。今年は第30回の節目にあたり、グランプリ受賞作品の上映のほか、映画監督の河瀬直美氏による記念講演、「地方の時代」映像祭30年「名作ドキュメンタリー」上映会などもあり、多数の市民と学生が参加した。



5月12日に行われた、「地方の時代」映像祭実行委員会の記者会見



▲第30回「地方の時代」映像祭2010告知ポスター

● 地域・地方から映像で問い続けた30年

「地方の時代」映像祭は、1980年にスタートした。神奈川県川崎市で開催された第1回映像祭には、全国の放送局と自治体から105の作品が寄せられ、放送現場と自治の現場との交流がはかられた。翌年の第2回の映像祭から、「映像コンクール」が中心の企画になり、放送局、自治体、市民から、地域を描き、時代を語る意欲的な映像作品の応募が増えてきた。

以来30年、映像祭の舞台は当初の22年間が川崎市(札幌、長野、富山で各1回)、2003年から川崎市、そして2007年から吹田市へと移ったが、「地域・地方からわが国のあり方を問う」という基本テーマは揺らぐことなく維持されている。

この30年間に、全国各地から映像祭に寄せられた応募作品は優に3000を超える。今回は「地方の時代」映像祭30年「名作ドキュメンタリー」上映会も催された。中央・極集中がますます進みつつある現在、新たな30年に向かう「地方の時代」映像祭の果たす役割は重要度を増している。

● グランプリは「笑ってさよなら～四畳半下請け工場の日々～」

第30回「地方の時代」映像祭2010は、「地域からこの国を問う」をテーマに掲げて、千里山キャンパス内で開催された。

11月20日に、贈賞式、30周年記念講演(河瀬直美氏)、グラン

プリ受賞作品上映、シンポジウムなどが行われた。21日にはワークショップがあり、22日から26日にかけて、今回の受賞作品およびミニネート作品の上映会が開かれた。また「地方の時代」映像祭30年「名作ドキュメンタリー」上映会も併催された。

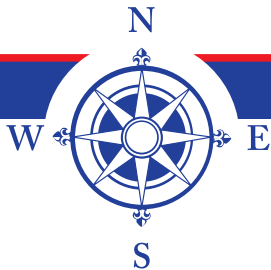
応募作品は、放送局部門、ケーブルテレビ部門、市民・学生・自治体部門、高校生部門に分かれて審査される。各部門ごとに優秀賞、奨励賞があり、共通してグランプリ(賞金100万円)1点が選ばれる。今年の審査委員は、辻一郎(ジャーナリスト)、河野尚行(元NHK放送総局長)、後藤正治(作家・神戸夙川学院大学教授)、佐藤友美子(財団法人サントリー文化財団首席研究フェロー)、橋本佳子(映像プロデューサー)、森達也(映画監督・作家)、結城登美雄(民俗研究家)、吉岡至(関西大学教授)の各氏。

一次・二次・最終審査を経て決まった今年のグランプリは、放送局部門の「笑ってさよなら～四畳半下請け工場の日々～」(中部日本放送)。名古屋市内の零細工場の閉鎖に至る半年間、働く人の姿と「笑い声」を通じて、自動車産業を支えてきた地域の今を描いている。

審査員からは「小さな町工場で働く3人の主婦たちの姿を明るく描きながら第4次下請けの厳しい現状、大不況の時代をたくみに伝えている」、「工場は閉鎖となったが、主婦たちの明るさ、たくましが印象的で、『地方の時代』映像祭に相応しい受賞作」と評価された。

KANDAI NEWS

■ 関大ニュース



著名作家を招いて「国民読書年」記念特別企画

関西大学では全学共通科目に「読書への誘い」を置いて、大学生の活字への回帰を推進している。この授業では、読売新聞社が主管する「活字文化推進会議」の協力を得ながら、著名な作家等を招いての公開授業を実施している。「国民読書年」でもある今年は、10月23日に『鴨川ホルモー』や『鹿男あをによし』等の関西に縁のある作品で知られる万城目学さんを千里山キャンパスに迎え、読書教養講座公開授業を行った。入場無料(事前申し込み)で、一般市民も多数聴講した。続いて11月26日に、直木賞作家の角田光代さんを招いての学内公開授業を開催する。また、「国民読書年」記念特別企画として、12月15日には、高槻ミュージックキャンパスで作家の玉岡かおるさんの講演が、来年1月29日にも併設中学生を対象に作家を招いての講演がそれぞれ予定されている。

東京で「関西4大学学長フォーラム」「大学トップマネジメントフォーラム」開催



関西4大学(関西、関西学院、同志社、立命館)主催、読売新聞社共催の「関西4大学学長フォーラム」が10月31日、東京・品川インターシティホールで開かれた。7回目となる今回のテーマは、「次代を担うリーダーを育てる—関西4大学の提言」。作家の重松清さんの基調講演に続き、重松さんと4大学卒業生によるトークセッションが行われた。パネルディスカッションでは、日本バレーボール協会理事の三屋裕子さんと楠見学長らが、これからの大学の人材育成について提言し、意見を交換した。当日は関西4大学入試相談会も開催され、各大学のブースで入試担当者との個別相談も行われた。

また11月14日には、朝日新聞社主催の「大学トップマネジメントフォーラム2010」が東京・港区のザ・グランドホールで開催された。テーマは「大学からのマニフェスト—混沌の時代、トップ自らが語る大学の魅力とは〜」。渡邊美樹・ワタミ株式会社代表取締役会長兼CEOの基調講演があり、パネルディスカッションでは楠見学長など8大学の学長・総長が、混沌の時代を力強く生き抜いていける人材を育成するために、大学のビジョンや取り組みについて話し合った。

関西大学東京センターの多彩な公開講座

首都圏における関西大学の拠点である東京センターでは、一般の方が聴講できる公開講座を開いている。7月には「南アフリカ大会を振り返って—世界のサッカー・日本のサッカー—」をテーマに、世界が注目したサッカーの祭典・ワールドカップを総括する講座を開催。サッカー解説者の山口素弘氏(元日本代表)、サッカージャーナリストの後藤健生氏(関西大学客員教授)、法政大学教授の山本浩氏(元NHKアナウンサー)が、日本サッカーの戦い、世界のサッカーの進化など、さまざまな角度から語り合った。

7月から8月にかけては、「平城京遷都1300年—天平文化をさぐる—」が4回にわたって開かれ、盛況だった。7月から2011年2月まで開講中の「スキルアップセミナー—白石真澄と考える“ジブンとオシゴト”—」は、社会の第一線で活躍している方を招き、政策創造学部の白石真澄教授の司会で、先の読めない時代に自分自身の人生と仕事を考える機会を提供する6回のシリーズだ。



東京センターで開催された多彩な公開講座▶

体育会テニス部が関西大学対抗リーグ戦全勝優勝

体育会テニス部男子が、9月18日から28日まで大阪・シーサイドテニスガーデン舞洲で開催された関西大学対抗テニスリーグ戦1部リーグで全勝し、1921(大正10)年の創部以来初となる優勝を見事、完全優勝で果たした。この結果、平成22年度全日本大学対抗テニス王座決定試合への出場権を獲得した。

10月21日から25日まで岐阜メモリアルセンターで開催された全日本の王座決定試合は、4位という結果に終わった。しかし、関西リーグの1部に昇格したばかりで悲願の優勝を果たしたうえ、全国4位という快挙に、さらなる快進撃が期待される。



写真提供：関大スポーツ編集局